

## 問題を抱えて生きる——終わりの見えない戦争の管理——

ブライアン・P・ファレル

1880年7月22日、英国政府はアブドゥル・ラフマン・ハーンをアフガニスタンの国王（アミール）として承認した。これにより第二次アフガン戦争は公式には終戦となった。しかし、この終戦は、重複する部分を持ちながらも別の種類の軍事紛争であったアフガニスタンと英領インド間の国境問題には実質的に何の影響ももたらさなかった。慢性的で低強度の軍事衝突が、両国間の国境をまたぐ境界地で繰り返されていた。英国にとっての問題は、この二つの紛争が一つに織り合わされたよう見えていたことである。英国の交渉役としてアフガニスタンの首都カブールに派遣されたレベル・グリフィンは、この英国側の見方と主たる目的を表明した覚書をアミールに提示した。

……英国政府はアフガニスタン国内への諸外国の干渉権を認めず、かつロシアおよびペルシア両国はアフガニスタン内政へのあらゆる干渉を慎むことを誓約しているため、殿下が英国政府を除くいかなる外国とも政治的関係を持ち得ないことは明白であります<sup>1</sup>。

アフガニスタンと英領インドの間の不確定の領土境界線は、2000キロ以上にも及んだ。アフガニスタンが独立を保ちながらも脆弱であれば、英領インドへの侵攻を防ぐ物理的な安全保障の手段となりうる。アフガニスタンは帝国防衛のための戦略的緩衝地帯になるというのが、英国側の大方の総意であった。ただし、そこには二つの根本的な問題があった。仮に脆弱なアフガニスタンが強大な敵対国の支配下に落ちた場合、その国がアフガニスタンをインド侵攻の足がかりに利用するかもしれない。英国はロシアをその大国と想定していた。ロシアの見え隠れする策謀に対する警戒心が、1839年と1878年の二度にわたる英国のアフガニスタン侵攻を引き起こしたのであった。一方、英国のアフガニスタン駐留は、侵攻の抑止にはなるとしても、境界地侵略に対する防衛手段にはならなかった。

侵攻に対する防衛と侵略の抑止との間の緊張関係こそが、大英帝国の北西辺境での長期に及んだ紛争から、戦争終結にかかわる最も難しい問題に対して示される歴史からの優れた事例である。すなわち、そもそも具体的なあるいは直接的な原因のない紛争をいかに

---

<sup>1</sup> British Library (BL), India Office Records (IOR), L/PS/20 Memo 12, Note on some points connected with the North-western Frontier of Afghanistan, with special reference to Badgheis and Panjdeh, 13 March 1885.

終結させるか、また解決しようのない問題をめぐる戦争をどうやって終わらせるのかという問題である。この事例では、紛争を解決するための最も一般的な3通りの道筋をとることなく、特定の戦争を終わらせることに終始したのであった。いずれの当事者も純然たる武力によって他方を圧倒あるいは殲滅することはできず、また、いずれも降伏して服従しようとはせず、そうする機会すらなかった。さらに、いずれの側も、軍事力を排した長期的共存を維持するための根拠を見出すことはできなかった。当然ながら浮かぶのは、なぜそれができなかったのかという疑問である。その答えは、地勢、政治、国家構築、文化、そしてこれらすべての要因と近代アジアの再秩序化という帝国の野心的計画との相互作用を詳細に検証することで見えてくる。

アフガニスタンと英領インドをつなぐ境界地のうち、南側のボラン峠から北側のチトラルにいたる北半分は、その大部分が世界でも指折りの険しい山地で、未開の民族が住む土地であった。英国がインドに覇権を確立するはるか前、この境界地は両方向からの侵攻経路であり、慢性的に武力紛争が続いていた。18世紀、これらの境界地には、パシュトゥーン（パタン）人あるいはパシュトー語を話す諸民族が、西側のペルシア系やアフガン系の勢力と東側のインド系勢力に囲まれるように居住していた。山岳地帯に住むパシュトゥーン人は有力な集団を形成し、やがて独立したアフガニスタン王国となる。しかし、社会は極めて部族的で、多数の氏族関係のネットワークによる結合や分断の関係が存在した。東側の近隣諸国との協力関係は、パンジャーブ地方のシク王国が域内の最強勢力として台頭してきた影響により、破綻した。このシク王国が1818年にパシュトゥーン人の中核地域に攻め入り、ペシャワールを占領した。ペシャワールはパシュトゥーン人の中心都市であった。また、インド・アフガニスタン間の軍事および交易上の主要な輸送路であったカイバル峠への東の入口を支配する戦略的要衝でもあった。シク王国は1834年にペシャワールを併合する。これにパシュトゥーン人とアフガニスタン政府は共に憤慨した。自分たちの領土への玄関口を、敵対者とみなされる勢力の手に握られたくなかったのである。英国は1849年にパンジャーブ地方を征服し併合したことで、この問題を引き継ぐことになった<sup>2</sup>。

しかしながら、これらはもっと古くから存在する根深い対立に、新たに付け加わった表面的な政変でしかなかった。チベットに発し、南西へ流れアラビア海に注ぎ込む大河インダス川は、パシュトゥーン人の境界地の高い山脈とほぼ並行して東側を流れている。このため、インダス川は「自然国境」を形成し、インド西部の統治者にとってはより確定しやすく防衛

<sup>2</sup> Stephen Tanner, *Afghanistan: a Military History of Afghanistan from Alexander the Great to the War against the Taliban*, Philadelphia, Da Capo Press, 2009 (2002); Tamim Ansary, *Games without Rules: The Often Interrupted History of Afghanistan*, New York, Public Affairs, 2012; Thomas Barfield, *Afghanistan: A Cultural and Political History*, Princeton, University Press, 2010.

しやすい北西国境となっていた。しかし、それは川の西側の肥沃で人口の多い平原を放棄することを意味していた。言うまでもなく、その平原はパシュトゥーン人が住む山間の境界地の山麓沿いに広がっている。この高地民族の中には、遊牧民から、村落に住み農作と家畜の放牧に依存する集団まで、様々な部族がいた。交易が生活の中心にある彼らにとって、戦争は商売に悪影響を及ぼすおそれがある。しかし、峠を通過する交易に通行料や税を課す格好の機会と、インダス渓谷の肥沃な農地の誘惑がそれを上回った。山岳地帯に住むパシュトゥーン人は、楽に富を得ようと度々インダス渓谷を襲撃したり、隊商を襲ったりした。このような暴力行動は、より広範な政治的紛争が誘因となることもあったが、多くの場合は局地的な情勢の表れにすぎなかった。このように、好戦的な山岳民族が自分たちより豊かな低地の経済を食いものにするという力学は、決してこの地域特有のものではないが、とりわけ深刻なものになりうる背景があった。この地方の山地は、通り抜けが困難で防御しやすいため、仮に民族、宗教、文化、地域や帝国の政治といった複合的要因がなかったとしても、世界でも有数の統制不能な「辺境地帯」であったはずである。その複合的要因が状況を最悪のものにしたといえよう。

インダス渓谷の新たな最大勢力となった英国にとって、この辺境地を統制しようとする試みは、それだけで常時の対応を要する軍事的課題となった。パシュトゥーン人はアフガニスタンの多数派であり、多民族からなる王国の最大集団であった。しかし、不確定な国境の反対側の英領インド内に住むパシュトゥーン人も多かった。カブールの統治者は、通例は血縁や宗教的結びつきに頼って、境界地部族との緩やかで不安定ではあっても実効ある関係を維持していた。アミールは二つの問題に直面した。第一に、山岳地帯のパシュトゥーン人は実際の面では断固として独立を守ろうとした。彼らにとって、国家への忠誠よりも氏族や部族への忠誠の方がはるかに重要であったため、基本的な政治的忠誠や軍事的支援を彼らに期待するのは無理があった。しかし、第二の問題として、パシュトゥーン人は自分たちの住む地域が複数の国に分割されることを拒んでいた。そのため、アフガニスタン政府は、越境的な政治として、不確定国境の向こう側に住む近親部族の状況に関心を持ち続けざるを得なかったのである。国は違うが同一の民族である集団と英国との関係は、一層困難を極めた。

実際には、「英国」とはロンドンの閣僚、政府高官、軍事顧問と、英領インドの首都カルカッタの同じ立場の人々、さらにパンジャブ地方と北西辺境沿いの知事、駐在顧問、行政官、駐在官、現地の軍指揮官らを意味する。1849年以降、これらの関係者の間では意見が一致するより分かれることの方が多かったが、いくつかの基本的な問題については幅広いコンセンサスがあった。中でも最も重要なコンセンサスは、帝国の北西辺境の局地的治安と、アフガニスタン王国全体の統治と治安維持という二つの問題を、一つに結合した

重要な利害として扱うということであった。それだけでも十分に複雑であったはずである。ところが英国は、より広域に及ぶ戦略地政学的ジレンマをそこに加えたことで、問題をさらに悪化させた。それは、ロシアが英国をインドの支配者の座から引き降ろすために武力に訴え、アフガニスタン経由で侵攻してくるのではないかという不安である。このような認識は複層化した懸念を生み出し、その懸念はまさに終結を許さない北西辺境での戦争をもたらした。終結が不可能であったのは、問題のすべての層に根本から対処できる解決の根拠を見出しようがなかったことによる。一つの層を解決しようとするれば、必ず他の層を悪化させることになったのである。

英国はアフガニスタンに制裁を加え、威圧することはできたものの、征服も併合もできなかった。北西辺境沿いのパシュトゥーン人の侵略を物理的に制裁したり、時には封じ込めたり懐柔したりすることはできたものの、完全に阻止することはできなかった。また、境界の英国側に住む多くのパシュトゥーンの部族や氏族に、「通常の行政」を受け入れ、近代国家に服従し、独立独歩の生き方を捨てるよう強制することもできなかった。英国の侵攻を引き起こしたのは、ロシアの野心に対する不安であったが、このことが従順なアフガニスタンの維持と、北西辺境の平穏確保を余計に難しくした。「前進」戦略は、暴力による報復を引き起こす。他方、攻撃性の弱いアプローチでは、アフガニスタン政府の策略や、辺境地の情勢不安を食いつめられない。これらが組み合わさり、インドや英国政府の警戒心と不安を駆り立て、さらに攻撃的な戦略への回帰を誘発した。ロシアとの敵対関係は、実は1907年の三国協定の成立により少なくとも一世代の間は解消された。しかし、それでも辺境戦争を終結させることはできず、3度目のアフガン戦争を防ぐことも、英国のロシアへの不信感を拭い去ることもできなかった。それはなぜなのか。この紛争をこれほど解決困難なものにしたのは何なのか。解決を阻み、終結を不可能にした真の要因は何だったのだろうか。

これらの問いへの答えは、アフガニスタン（アフガンの国家）である。主なテーマは三つあった。すなわち、戦略的な地理的条件、アフガン国家の性質と、より広範な諸国家システムにおけるその位置、そして境界地のパシュトゥーン部族民とアフガン国家の関係性である。本稿では、これら三つのテーマについての英国の認識に焦点を当てる。この帝国の北西辺境での戦争を英国がどのようにして終結させようとしたかを分析する。そしてこの戦争は解決することはおろか、終結させることすら決してできず、管理するしかないということ英国が最終的に受け入れたのはなぜかを解説する。

そもそも、1849年以降の北西辺境沿いの情勢を「戦争」と呼んでいいのだろうか。物理的な暴力や軍事行動はほとんどない時期もあった。様々な理由（交付金、敵側から取り込んだ補助部隊の利用、合理的な現地ネットワーク形成と同盟構築、熟練した外交手腕など）

で、多くのパシュトゥーンの氏族や部族集団が侵略や襲撃を全く行わなかった期間もあった。英領インド帝国は二度にわたり、開戦方法について自国の認識に従い、アフガン国家に対し正式に宣戦布告をしたが、英領インド内のパシュトゥーン人集団に対する宣戦布告は不可能であった。法的には、英領インドはこの辺境地紛争を緊急治安維持活動として管理していた。しかし、その多くは、集中的な軍事力の行使、容赦ない火力の意図的な使用、懲罰的な器物損壊などを伴い、極めて高い暴力度で遂行された。実際には、この北西辺境の情勢は戦争状態であったと認識するべきであろう。その最重要の理由は、主要な交戦勢力間の関係である。

英領インド政府は、アフガニスタンとの領土境界に至るまでの地域の主権を主張した。1893年までこの境界は不確定であったが、それはかなり以前の合意と、この土地についての伝統的な理解の産物であった。1893年からは、科学的測量によって境界がより明確に引かれ、二国間協定によって正式なものとなったが、パシュトゥーン人の居住地域は常に分割されていた。また、インド政府は、山岳地帯に住むパシュトゥーン人部族を、インダス渓谷の比較的従順な住民と同じ方法で統治するのは極めて困難だと感じていた。1849年以降、英国である暗黙の発想が次第に強まり、やがて政策を左右する効果的な認識となる。それは、現実には二つの辺境があるという見方であった。英領インドが主権を主張している領域のかなり内側に観念的な内部境界線があり、その東側では「通常の行政と政府」が機能できた。英国政府は、この境界線とアフガニスタンとの不明瞭な国境との狭間の空間を、北西辺境の「部族の土地」として扱い、そこに住む人々を救いがたく暴力的で統制することはできても真に統治することはできない臣民であるとみなしたのである。1849年以後はパンジャブ州政府がこの地域の行政管理に当たったが、日常業務は現地の民政官が駐留軍の支援を得て実施した。英国はかつてのシク王国の戦略を採用し、インダス渓谷西側の緩衝地帯の物理的保護を提供した。このため、辺境の「英国側」に住むパシュトゥーン人には、英国側の定義による「秩序」を強制しなけりなかつた。これは常に、境界線の向こう側にいる同族との諍いの火種となつた<sup>3</sup>。

ほぼすべてのパシュトゥーン人は、このような大君主的な支配を拒否し、忠誠やアイデンティティについてこの地方独自の認識を表明した。彼らには、どんな類のものであれ自分たちより高位の権威を長期にわたって受け入れることは稀であった。また、何世紀もの間、物理的にも政治的にも極めて困難な環境を生き抜くために闘うことに慣れていた。彼らの兵力は成人男性の全人口に等かつた。ただ、これが大規模なあるいは持続的な兵力の集

<sup>3</sup> Jules Stewart, *The Savage Border: The Story of the North-West Frontier*, Stroud, The History Press, 2013 (2007); Hugh Beattie, *Imperial Frontier: Tribe and State in Waziristan*, London, Routledge, 2013 (2002); Paddy Docherty, *The Khyber Pass: A History of Empire and Invasion*, London, Faber & Faber, 2007.

中を生むことは滅多になかった。パシュトゥーン人は概して、より広範な、あるいは次元の高い政治的問題に関する合意を長期間維持することはなかった。たいていは小規模な地元部隊で出陣し、地域的にごく限られた目標を追求し、状況が荒れてくれば山中や村落に戻って姿を消した。しかし、仮に彼らが何らかの外部の権威に対し、単に力でねじ伏せられるのではなく、正当なものあるいは支援する価値があるものとして受け入れる素地があったとしても、英国やインドにそうすることは決してなかった。おそらくパシュトゥーン人の唯一の真のコンセンサスは、英領インドにはパシュトゥーン人とその土地に干渉しないでほしいということであったろう。つまり、交易も課税も襲撃も彼らの判断に任せ、アフガン国家に属するのか、あるいは関係を結ぶのか、またその方法を彼ら自身に決めさせるということであった<sup>4</sup>。

英国の意志決定者の大部分は、ほとんどの場合、そうはいかないと考えていた。パシュトゥーン人の兵力は、その社会、文化、政治、地勢的な要因から極めて分散的で流動的であるため、英領インドにとってロシアが呈するほどの脅威にはなり得なかった。しかし、これらの要因は、英国がパシュトゥーン人とその領域を統制することや、彼らは安全で無害だと認めることを難しくしてもいた。より大きな規模では、英国の目から見ればアフガン国家にも同じ問題が当てはまった。アフガン国家はロシアから自国を守ることはできない。懲罰はできても、服従させるのははるかに難しく、まして統制など至難である。さらに、パシュトゥーンの部族指導者もアフガンのアミールも、英国が真に欲したもの、すなわち領土と人民を安定した基盤で統制することを実現することはあり得なかった。安定し秩序のある人民と領域であれば、19世紀後半に帝国主義大国がアジアに構築しようとしていた、より広域な「近代的」な国際国家システムに問題なく取り込むことができた。しかし、英国はアフガニスタン全体とパシュトゥーンの境界地を、地政学の用語でいう「空白領域」とみなして

<sup>4</sup> パシュトゥーン人またはパタン人と呼ばれる様々な部族集団は、インドヨーロッパ語族の東イラン語群に属するパシュト語のいずれかの方言を話す。多くは、従うべき慣習、規範、法を定めたほぼ不成文の掟「パシュトゥンワリ」を今なお守っている。イスラム教よりはるかに古くから伝わるこの掟はパシュトゥーン人の文化を特徴づけるもので、「命の掟」とも翻訳することができる。方言や分族が多数あり、通常は100を超える下位部族があるとされる。18世紀以降はドゥラーニ族とギルザイ族が支配的氏族となり、しばしばカブールとアフガン国家の支配権を争っている。O. Caroe, *The Pathans 550 BC-AD 1957*, London, Macmillan, 1958は、現在も版を重ねる古典的研究の一つである。他に重要な研究として以下のようなものがある。C. Noelle, *State and Tribe in Nineteenth Century Afghanistan*, London, Curzon, 1997; J. W. Spain, *The Way of the Pathans*, London, Robert Hale, 1962; *The Pathan Borderland*, The Hague, Mouton and Co, 1963. ウィンストン・チャーチルは若い頃、英国人に広く行き渡ったパシュトゥーン民族のイメージを次のように捉えている。「自己保存のため一時的休戦が必要となる収穫期を除けば、パタンの諸部族は常に私的または公的な戦争に従事している。男はすべて戦士であり、政治家であり、神学者である。大きな家はどれも事実上の要塞であり、日干しの粘土だけで造られている（嘘ではない）が、胸壁や小塔、銃眼、側面塔、跳ね橋などが完備されている。どの村も防御を固め、どの一族も敵討ちの機をうかがい、どの氏族も確執を抱える。無数の部族や部族連合がすべて、互いに晴らすべき恨みを持っている……」Winston Churchill, *My Early Life*, London, Butterworth, 1930, 134.

いた。これは英国にとって、容認できないながら解決困難な問題であった。

インドに最強の基盤を築くことで、インド亜大陸は、すでに世界規模の計画になっていた大英帝国の拠り所となった。帝国はアジアを含む世界の再秩序化を模索した。しかし、ロシアの飽くなき領土拡大は、声高な自賛や威嚇も伴い、ロシア帝国が独自のアジア再秩序化構想を持っていることを示唆していた。北西辺境沿いの紛争の解決へ向けたあらゆる取り組みは、距離はより遠いものの危険度の高いロシアの野心を背景にして展開した。しかし、ロシアの行動に対応するためのあらゆる取り組みは、その行動が現実のものであれ想像上のものであれ、もともと御し難い北西辺境で激しい反発を引き起こした。英国にとっては、二つの問題が一つに融合していた。ロシアの脅威を考えれば、北西辺境に対する干渉を控えるのは危険が大きすぎる。しかし、パシトゥーン人の敵意はより広い範囲の政治力学に密接に関係しているように見え、容易に封じ込められる局地的な治安問題にすぎないと片付けることはできなかった。第二次アフガン戦争の根本原因は、実は英国で長年続いていたインド防衛をめぐる議論にあった。この議論は北西辺境に重点が置かれ、いわゆる前進戦略の擁護派と、国境閉鎖の方が効果的だと主張する一派との対立を生んでいた。

前進戦略は、敵対的なロシアという重要な前提に基づいていた。ロシアの政策は帝国主義的拡張であり、アジアの支配をもくろむロシアにとってインドにおける英国勢力は邪魔な存在であり、ロシアはそれを放逐しようとしている。アフガニстанは脆弱で、ロシアに侵略される可能性がある。そうなれば、ロシアはインドにも侵攻する構えを見せるだろう。さらに悪いことには、アフガニстанがイスラム社会の確立された交流経路を利用し、インドの少数派ながら相当数のイスラム教徒を扇動して第五列に仕立て上げるおそれもある、という見方である。したがって、英国がインドを守るには、北西辺境に軍を配置するだけでなく、アフガニстанを勢力下に置かなければならない。ロシア軍を迎え撃つのは、北西辺境から北のできるだけ遠い場所である必要があった。1868年に書かれた影響力の強い覚書には、「アフガニстанへの干渉は今や責務であり、カブールの秩序回復に当たって多少の出費や責任が生じて、結局は安上がりになるであろう」と記されている<sup>5</sup>。

これに対し、国境閉鎖を主張する反論は、ロシアの意図ではなく、アフガニстанにつ

<sup>5</sup> 執筆者のサー・ヘンリー・ローリンソン少将は「アッシリア学の父」と称される著名な東洋学者で、王立協会会員であった。1827年から55年までアジアで様々な職務を歴任した。1868年にはフルーム選挙区選出の下院議員を務めており、インド大臣の諮問機関として設置されたインド参事会に任じられた直後で、歳出に関する特段の権限を与えられていた。以後、1895年に死去するまで同参事会の任にあり、前進戦略支持派の筆頭となった。1875年には、その見解を著書 *England and Russia in the East* として出版した。近年になって回顧録が再出版されている。George Rawlinson, *A Memoir of Major-General Sir Henry Creswicke Rawlinson*, London, Adamant, 2005. 入手しやすい論考として、次の文献がある。Karl E. Meyer and Shareen B. Brysac, *Tournament of Shadows: The Great Game and the Race for Empire in Central Asia*, New York, Basic Books, 1999, ch. 6.

いての分析を軸に展開された。この国は飲み込むには毒が強すぎるという見方である。英国は1839年にアフガニスタンに侵攻し、その後も干渉を続けたことから特に嫌悪され恐れられていたが、どの大国であれアフガニスタンを征服しようとするれば、必ずその報いを受けたはずである。1867年の影響力のある覚書の記述によれば、純然たる地理的および距離的要件に加え、外部の侵略に対して団結するというアフガニスタン人に深く根づいた傾向を踏まえれば、ロシアがアフガニスタンを侵略しようとするれば、非常に長い補給線の末端で断固たる抵抗に遭遇し、長期にわたる紛争が泥沼化するとみられていた。仮に英国がアフガニスタンに干渉せずにいれば、侵略してきたロシアを追い出すための支援を求めてくる可能性が高い。また、不干渉政策には、アフガニスタンへの他の国の不干渉を導く効果もあり、英国は現実の優先課題とすべきインドの政府、経済、インフラ、防衛の強化に集中することができる。北西辺境沿いで戦闘を行うことの危険性に関して言えば、境界地の住民はあらゆる外部干渉に対して非常に敵対的であるため、もし英国がロシアの侵略を許してしまえば、間違いなく「侵略者に対抗するため我が国に支援を求めてくる部族が、おそらくは一つならずある……そのような状況で、彼らをうまく味方につけることができるのはどちらであろう。我が国か、あるいはロシアか？」<sup>6</sup>]

この論争が影響したかはさておき、1870年代半ばにはロンドンでもカルカッタでも前進戦略が支配的になっていた。これは主としてロシアの行動に起因する。ロシアの中央アジアへの領土拡張はクリミア戦争の敗北によって拍車がかかり、ロシアは英国支配下の領土のかなり近くまで軍を進めてきていた。ロシアの拡張欲は極めて野心的な口振りで喧伝され、とどまることがなかった。また、ロシアは1864年にアレクサンドル・ゴルチャコフ外相が起草した有名な公開覚書で、その指標を定めたとみなされた。ゴルチャコフは、ロシアが目指すのは安定した恒久的辺境の確立のみであると主張し、どうすればそれを実現できるかを明示した。すなわち、「何らかの組織化された形態の社会と、それを指導し代表する政府」を持たない領域は、そのような社会は「不穏で不安定な性質があり、最も望ましくない近隣地域である」ため、これを吸収することが必要である。ただし、「[ロシア]との平和的な通商関係の方が、無秩序、略奪、報復、恒久的戦争状態よりも利益になること

6 執筆したのは、ローリンソン以上に傑出したインド参事会の一員となったサー・ジョン・ローレンスである。ローレンスは英国によるインド統治における重要人物の一人であった。1829年に東インド会社の官吏としてインドに赴任し、第一次および第二次シク戦争と、その後のパンジャープ併合に顕著な役割を果たし、パンジャープ州知事となった。1863年から69年までインド総督を務め、その資格において、英国はアフガニスタンの継承政治に干渉すべきではないと考える理由を説明する目的でこの覚書を執筆した。ローレンスに関する近年の良質な研究は少ないが、次の文献では洞察のある論考がなされている。Lawrence James, *Raj: The Making and Unmaking of British India*, London, St. Martin's, 2000. Meyer and Brysac, ch. 6に、ローレンスとローリンソンのやりとりが明瞭にまとめられている。

を是認する」政府が現れたところで、ロシアは立ち止まることができるし、そうするであろう、というのである<sup>7</sup>。こうした言い回しは、近隣のパシュトゥーン地域やアフガニスタンに対する英国の姿勢にまさしく当てはまったため、英国当局者の多くは、ロシアの野心には明確な限度があるという主張を信用しなかった。ゴルチャコフはアジアにおけるロシアの拡張を、「文明化された」諸帝国による「近代的」計画の共通の利益として正当化しようとした。しかし、英国から見れば、その試みは中央アジアの自然国家やアフガニスタンを支配されるべき「望ましくない近隣地域」、すなわち政治的空白領域として非難する意図があるとも受け取られた。

こうしたレトリックを交えた領土拡張行動から、英国では、ロシアの計略やカブールでの政治的動きをにおわす兆候を、ことごとく敵対的な軍事的陰謀とみなす傾向が強まった。それにより、アフガニスタンとの境界線だけでなく、現地政府をも統制しようという意識が再燃した。この状況に、英国政府が帝国防衛全般について一層強硬なアプローチを採用したことが重なった結果、誰であれアフガニスタンの統治者がロシアの圧力を拒絶し英国の主導に従うよう、英国は再びアフガニスタンに侵攻した。しかし、実りは少なかった。英国の侵攻によって一人のアミールが放逐され、別のアミールが王座についたのは確かである。だが、英国がアフガニスタンの政治を誘導するには、王朝や部族同士の対立関係に関与するしかなかったのだが、それが裏目に出た。英国は他国内の政治闘争に巻き込まれ、そのために激しい恨みを買ったのである。アブドゥル・ラフマンを頼みにしたことは、1878年の侵攻は何の解決にもならなかったことを認めたに等しかった。亡命中のラフマンはロシアの庇護を受けていた。英国が期待できたのは、ラフマン自身の意向がいずれの大国からの干渉にも負けない強いアフガン国家の構築にあることくらいで、さしたる安心材料にはならなかった。しかも、この新たな関係は最初からつまずいた。英国はカイバル峠両端の完全な支配権を確保し、アフガニスタンの新体制にこれを承認するよう強要した。この要所における軍事的立場を強化すると共に、政治的に目に見える利益を少なくとも一つは確保するためである。しかし、この行動はアフガニスタンとパシュトゥーン人の怒りを増しただけであった。それを表すように、紛争を終結させるはずの公式式典がカブールで行われた数日後、マイワンドの戦いが勃発し、英軍はこの戦争最大の敗北を喫した。英国は報復を果たしたものの、アフガニスタンの抵抗の全体的な結果として、前進戦略の強硬な擁護派は、アフ

<sup>7</sup> ゴルチャコフの覚書の注釈つき英訳が、研究プロジェクト *Empire in Asia: A New Global History* のウェブサイトに掲載されている。http://www.fas.nus.edu.sg/hist/eia/documents\_archive/gorchakov.php。次も参照。William C. Fuller Jr., *Strategy and Power in Russia 1600-1914*, New York, Free Press, 1992, ch. 7; Meyer and Brysac, ch. 6; Peter Hopkirk, *The Great Game: The Struggle for Empire in Central Asia*, New York, Kodansha, 1994 (1990).

ガニスタンを分割し、いくつかの重要な戦略的要衝、特にカンダハールを占領するという計画を撤回せざるを得なくなった<sup>8</sup>。これによって英国はさらに苦しい立場に陥ったといえよう。中央当局によって効果的に統治されうる存続可能なアフガン国家を構築するというだけでも十分に難題であったところに、英国はその国家の外交政策の統制権を要求したことで、その政府や国民から何の感謝も賞賛も受けることなく、その国の防衛責任を担うことを余儀なくされたのである。

この第二次アフガン戦争の結果、英国には二つの懸念をめぐる議論が残された。すなわち、いかにしてアフガニスタン政府を統制し、アフガニスタンとその国境をロシアの野心から防衛するか、そして、パシュトゥーン人のインドへの侵略やインダス渓谷への襲撃をいかにして防止、撃退、あるいは少なくとも抑制するかという懸念である。現在のトルクメニスタンやウズベキスタンにロシアが着実に軍を進めていたことから、これらの懸念は一層深刻なものとなった。これが1885年春に重大な危機へと発展する。ロシア軍がパンジェ（現セルヘタバート）のオアシス地域からアフガニスタン軍を放逐したのである。これによって国境が引き直され、ロシア軍がヘラートのすぐ近くまで迫る結果になった。二つの帝国主義大国は外交によってこの危機を緩和し、アフガニスタンの北部国境沿いの国境線の測量と再画定を行うための二国間委員会を設置した<sup>9</sup>。しかし、このことが、依然として前進戦略に大きく傾いていた英印両政府での議論の重心に変化をもたらした。

1830年代から、英国の大戦略の立案者らはヘラートを要所の一つとみなしていた。侵略者はヘラートを起点に、カブールを北方からの侵攻から守っているヒンドークシュ山脈の側面を回り、西側からアフガニスタンに侵入できるためである。英国の戦略的思考によれば、アフガニスタン政府を掌握するには、西のヘラート、東のカブール、南のカンダハールという三つの主要都市の掌握が必要とされていた。パンジェ紛争の後、英国の当局は、インドを

<sup>8</sup> この軍事行動の経緯については次を参照。National Archives, United Kingdom (NA), CAB38/5, General Staff War Office Memorandum, Defence of India: Information regarding the Second Afghan War, 20 June 1904. また、次も参照。Gregory Fremont-Barnes, *The Anglo-Afghan Wars 1839-1919*, Oxford, Osprey Publishing, 2009, Part II; T. A. Heathcote, *The Afghan Wars 1839-1919*, Stroud, Spellmount, 2007 (1980); D. S. Richards, *The Savage Frontier: A History of the Anglo-Afghan Wars*, London, Pan Books, 2003 (1990).

<sup>9</sup> パンジェ危機とアフガニスタン北側国境問題については、以下の資料に詳しく記録されている。BL, IOR, L/PS/20 Memo 13, Telegraphic Correspondence with Sir P. Lumsden subsequent to his arrival at Sarakhs, November 1884-November 1886; Memo 14, Correspondence respecting the Demarcation of the Northwest Frontier of Afghanistan from the Heri-Rud to the Oxus, Parts 1 through VI, July 1884-December 1886; Memo 16, Correspondence relative to the Boundary of Afghanistan on the Upper Oxus: Question of Shighnan, August 1884-March 1893. また、次も参照。Memo 12, Memoranda Relating to the Frontiers of Afghanistan, April 1884-September 1885. これらの文書には多数のロシアの電報や覚書が含まれている。次も参照。James Hevia, *The Imperial Security State: British Colonial Knowledge and Empire-Building in Asia*, Cambridge, University Press, 2012.

守るにはアフガニスタンで三つのことを行う用意が必要だと結論した。すなわち、北西辺境の南域の防御のため、必要であればカンダハールを占領確保すること、カブールの統治者に英国への外交統制権の譲渡を認めさせること、そして、他国、特にロシアにヘラートを奪われないようにすることである。前進戦略の特に強硬な擁護派は、アフガニスタンの独立を維持するためにヘラートを防御しなければならないと言いながら、同時にインドの治安部隊には、北西辺境のはるか向こう側でアフガニスタン側はかなり深く入ったヒンドウークシュ山脈沿いの防衛陣地が必要だと主張した<sup>10</sup>。だが、それがアフガニスタン側のさらなる怒りを招くのは明らかだった。

この大戦略に関する議論を解決するための最も一貫した試みは、対応能力、すなわち今で言う「地上の真実 (ground truth)」に焦点を当てていた。前進戦略の批判派はこれを強調した。ロシアが地歩を固めた基地地域は、依然としてアフガニスタンから遠く離れていた。その間の地域は大部分が広大なステップ地帯や乾燥した砂漠、険しい丘陵で、その地域の脆弱国家の反抗的な住民はロシアの支配をよく思っていない。大規模な軍隊をこれらの地域を通過してアフガニスタンに移動させ、補給を維持するのは、たとえ実質的な反抗には遭わなかったとしても、困難な作戦になることは間違いなかった。他方、ロシアのある開発プロジェクトにより、戦略的均衡が変化するおそれがあった。鉄道建設である。カスピ海横断鉄道は1890年の時点でカスピ海沿岸のクラスノボツクを起点に、東はタシュケントとコーカンドまで開通しており、これによってロシアの東西方向の兵站線は大きく向上した。この鉄道は、ロシア帝国に吸収されていた中央アジア諸国とアフガニスタンとの北側国境のほぼ全長と並行して走っていた。ロシアの勢力はアフガニスタンを飲み込もうとしているように見え、もはや安穩としていられないところまで北西辺境に迫っていた<sup>11</sup>。これが引き金となり、アフガニスタンと英国の両政府は、互いのために境界地の治安維持を強化す

<sup>10</sup> BL, IOR, L/PS/20 Memo 12, Item I, Note by Maj.-General P.S. Lumsden on the Aspect of Affairs at Herat and in Central Asia, 24 July 1885; Item K, Memorandum by Col. A.S. Cameron, Some Observations as to the Military Value of a suggested Frontier Line between Afghanistan and the Russian Empire, 19 April 1885; Meyer and Brysac, *Tournament of Shadows*; Hopkirk, *The Great Game*; Alice Albinia, *Empires of the Indus: The Story of a River*, London, John Murray, 2008.

<sup>11</sup> 1890年に一言一句書かれたと思われる1927年の見解には、ロシアの鉄道開発が英国の戦略的思考にいかにか強く影響したかが次のように叙述されている。「戦略的に、インド北西辺境はロシアの中央アジア鉄道とインド国内の英国の鉄道端末駅との間の作戦地域となりうる領域全体を包含する。」BL, IOR, L/MIL/17/13/8, Indian Army General Staff Memorandum, Amendments to a Study of the Existing Strategical Conditions on the Northwest Frontier of India, January 1928. しかし、この脅威の最もありうる性質や規模と、それにいかにして対抗するかという問題は、引き続き活発な議論の主題となった。NA, WO33/49: War Office Memorandum, Report of the Indian Mobilization Committee Regarding the Strategical Situation in Central Asia, 31 May 1889; Joint Memorandum, Director of Military Intelligence, War Office, and Military Secretary, India Office, Indian Army Field Force, 19 August 1889; Minute on Indian Army Field Force memorandum, Adjutant-General to the Forces (General Sir Garnet Wolseley), 25 August 1889.

べく、アフガニスタンの国境線を真剣に見直し始めた。しかし、1893年の交渉でより正確な境界線が生まれたことで、英国の北西辺境防衛の歴史上でも際立って暴力的な一時期が訪れる。

デュアランド線は英領インドとアフガニスタンの境界線で、今のアフガニスタンとパキスタンの国境となっている。南は現在のイラン、アフガニスタン、パキスタンのバローチスターン州の接点から、北はワハーン地方に至る。軍事的に重要な地帯にあたるワジリスタンからチトラルまでは、より正確な測量に基づく境界線が引かれ、それ以前の不明確な線よりも無慈悲なかたちで多くのパシュトゥーン人部族地域を恣意的に分断していた。英国の軍事的関心は、管制高地を支配し、峠や溪谷への経路を掌握する必要性に基づくものであったため、一方的にこの極めて不適當な測量の結果が押しつけられた。「科学的な辺境線」という考え方は、当時のベンジャミン・ディズレーリ首相が1870年代に重要問題として提起した、より具体的な境界線を明確化したいという英国の長年の願望の表れであった。境界線は、地勢、地形、分水界についての近代的理解と、移動、作戦、要塞化に関する軍事的要件によって決定された。現地の慣習や認識、また土地の用途は、不都合な場合には尊重されなかった。おそらくこの軍事偏向が最も劇的な形で表れたのは、以前に画定されたアフガニスタンの領土境界を北東へ大きく引き伸ばし、ヒマラヤ山脈から突き出たワハーン地域のパミール高原沿いの細長い土地を含めたことだろう。幅がせいぜい20キロのこの回廊地帯は、英領インドの最北西端とロシアの支配領域の最南東端の間にアフガニスタン領土を挟み込むことにより、アフガニスタンと中国をつなぐというただ一つの目的に利用されたのである<sup>12</sup>。このような僻地にロシアが呈しうる実際の軍事的脅威があったとしても、この英国の態度は脅威への対処に見合う以上に、部族の怒りを買うことになる。英国がアフガニスタンを、いざとなればその国自身の利害はさしたる考慮に値しない保護領として扱ったことで、アフガン国家はパシュトゥーン地域の再秩序化に対する部族の怒りへの共感をより積極的に示すようになった。

短期的な結果は、北西辺境沿いでの暴力行為の激化であった。実際にこの引き金となっ

<sup>12</sup> BL, IOR, L/PS/20/Memo 18, Command Paper 8042, Afghan Boundary Agreement and Copy of Correspondence relating to Afghan Proceedings in Kafiristan, June 1896. L/PS/18/A 82, Note by Sir Stewart Payley on the Pamir Question and the Northeast Frontiers of Afghanistan, 19 November 1891には、デュアランド線交渉につながった英国の懸念が詳しく説明されている。これはL/PS/20 Memo 17にも続き、ここには1892年7月から1894年7月までの関連文書が含まれる。要点は次の覚書に的確に表現されている。Military Considerations Connected with the Pamir Frontier, written on 9 July 1893 by Col. J.C. Ardagh, Indian Army Intelligence Branch。「したがって軍事目的においては、最も高い分水界に沿った辺境には欠陥があり、我々は敵が緩衝地帯に足場を定め、これらの縦谷を占領し、それにより峠を奇襲する態勢を整える可能性を排除することを目指さねばならない。したがって、これらの縦谷をすべて我が国の領土に残す、あるいは少なくとも我が国の影響下に残すような境界線を求めるべきである。」

たのは、継承にからむ部族政治への英国の関与と、英領インドへのパシュトゥーン人の侵入の頻発であったが、新たな境界線がすべてを激化させた。このため、英領インド軍は北西辺境沿いの主要な渓谷とパシュトゥーン人の居住地の大部分に、大規模な軍事行動を大勢力で仕掛けることを余儀なくされた。1894年にマスード、1895年にチトラルとスワート渓谷へ進攻し、1897～98年のマラカンドとティラー渓谷での行動は中でも最も激しいものとなった。これらは、1858年以降に英領インド軍が境界地で行った60回を超える実質的な征伐遠征や軍事行動の中でも特に際だって大規模で血なまぐさい事例であったが、全体の一部にすぎない。英国の民政官や軍指揮官の多くは、これらの近年の暴動は部族地域を通過する扇動者らによってかき立てられたムスリム狂信主義の波が引き起こしたものだと感じていた。また、そうした当局者の大半は、アフガニスタン政府が暴動に手を貸し、煽動していると思っていた。この二つの要因がいずれも関係していること示す証拠はいくつかあり、特に、アフガニスタンを通過する国際武器貿易から、大量の近代兵器が境界地に流入し続けたことが挙げられる。しかし、より根深く有害な原因は、軍事行動そのものが生じさせた怒りは言うまでもなく、自分たちの政治や土地への外部からの干渉に対する現地の人々の憤りという以前からの要因であった。とりわけ暴力的な侵略や襲撃に対しては、共通の方針として厳しい「統制」措置が適用された。農地や作物は破壊され、穀倉は叩き潰され、村落は焼打ちにあい、住民は家を追われ丘陵地に避難した。このような報復措置の拡大は、悪循環を生むだけであった。強圧的な懲罰によって一旦は服従を強要することができたが、その後も、些細なきっかけが根底にある敵意に煽られ、再び戦闘が勃発していった<sup>13</sup>。

この悪循環を打開する唯一の方法は、状況が最悪な地区を特定し、局地的レベルで現場の方針を変えることであった。かねてからいくつかの有効な方法や構想が提案されており、実施されたものもあった。たとえば、現地の部族や氏族の指導者と特定の一過性の問題を主に取り扱う協力関係を構築すること、現場で問題に直面している人々に権限と意思決定を委任すること、当該地域の行政管理を別個の責任とすること、部族指導者に問題を起こさないことと引き換えに「交付金」を与えること、事前の侵入の予防や事後の懲罰ではなく、侵入に対する防御に集中することなどである。しかし、19世紀末には、少なくとも一時の間、それらがすべて一つに統合された。それは、かなり異色と言えるインド総督、ジョージ・ナサニエル・カーゾンの行動力と先見の明によるものであった。

<sup>13</sup> BL, IOR, L/PS/20/Memo 18, Command Paper 8037, Correspondence relating to the Occupation of Chitral, 1896; India Office, *Military Operations on the Northwest Frontiers of India 1897-98*, London, HMSO, 1898; Pioneer, *The Risings on the North-West Frontier*, Allahabad, The Pioneer Press, 1898; Robert Johnson, *The Afghan Way of War: How and Why They Fight*, Oxford, University Press, 2012, ch. 4. 北西辺境境界地における軍事行動に関する最も重要な近年の英国側の研究は、次の著作である。Tim Moreman, *The Army in India and the Development of Modern Frontier Warfare, 1849-1947*, London, Palgrave Macmillan, 1998.

1899年1月に総督に就任したカーズンは、実に卓越した経歴の持ち主だった。それまでの15年間の大半を、まさにこの役職につくための準備に費やしていたのである。関係する地域を、時に困難な船旅も経験しながら隈なく旅行し、ロシアからペルシア、北西辺境を含むアフガニスタンと中央アジアからインド、さらに中国、日本にまで足を延ばしている。1894年にはカブールを訪れ、アミールのアブドゥル・ラフマンと国際問題について長時間の会談をした。旅行の記録からそれぞれの土地や国民、政治を分析した2冊の著書はベストセラーになった。また、インド省の次官を1期務め、下院で省の政策の陳述を行った。カーズンが防衛を託された広大な地域に対する総合的な理解や精通度の面では、英国人の高位の政治家、文官、軍将校の中で彼に匹敵する者は英国にもインドにも一人もいなかった。また、「鼻持ちならない人物」と生涯揶揄されたように、自信満々でこれらの問題に取り組もうとする姿勢もカーズンの個性であった<sup>14</sup>。総督の職に落ち着き、新たな管轄地を巡回し終えると、カーズンは前進戦略を推進し、軍事のおよび政治的既得権に対抗する正面攻撃に精力的に乗り出した。

カーズンは二つの堂々たる主張を展開した。第一に、ロシアの行動は懸念の一つであり、問題になるおそれはあるが、いつ起きてもおかしくない戦争として扱うべきではないこと。第二に、パシュトゥーン人の北西辺境侵略への対処における政治制度と軍事戦略にはいずれも根本的な欠陥があり、修正が必要だということである。カーズンは全体としてのロシアの野心や、インドにおいて英国に問題を生じさせようとする意図を疑ってはいなかった。しかし、ロシアがアフガニスタン経由でインドへの軍事的に危険な侵攻を実行する、あるいはその可能性があるという主張は認めなかった。また、パシュトゥーン人の境界地は放棄も侵略もできないことには同意したが、これまでとは異なる扱い方が可能であるし、そうしなければならぬと主張した。大戦略問題の解決については、ロシアの脅威にはアフガニスタンよりもはるかに幅広い次元で対峙すべきだとカーズンは主張した。一方、パシュトゥーン人への対応については、問題にもっと接近した解決策を求めるべきだという逆の議論を提示した。

カーズンは、多くのロシア人が長年口にしていた、「インドに脅威を与えれば英国はひどく動揺する」とする言説を明示的に耳にした最も重要な英国高官であった。この脅威を利用すれば別の面で英国に譲歩を強いることができると、ロシアは考えていたのである。これ

<sup>14</sup> BL, IOR, Curzon Papers, Mss Eur F111 56, Memorandum by Curzon on his Visit to Afghanistan, 2 December 1894. カーズンの特に影響力のある大著は次の2冊である。*Russia in Central Asia and the Anglo-Russian Question*, 1889; *Persia and the Persian Question*, 2 vols, 1892 (出版はいずれも London, Longmans, Green & Co)。1896年に The Royal Geographical Society により出版された *The Pamirs and the Source of the Oxus* も重要である。David Gilmour, *Curzon: Imperial Statesman*, New York, Farrer, Straus and Giroux, 1994はカーズンの人となり非常によく捉えているが、カーズンのインドにおける経歴とアジアでの経験についての最良の資料は、British Library が収蔵する大部のカーズン文書集である。

は、それから何十年ものちにヘンリー・キッシンジャーが「リンケージ」という鮮烈な言葉で表現した戦略である。1886年のアレクセイ・クロパトキンや1898年のW・レベデフ大尉など、アフガニスタン経由でのインド侵攻という野心的な計画を練った好戦的なロシアの当局者は、有用な目的を果たした。インドにいる英国人を苛立たせることが、極東あるいはバルカンでの好結果につながる可能性があったのである。カーズンは、これを脅しだとは考えず、むしろ英国も加わった二国でそのゲームをプレーすることが可能であり、またそうすべきであると主張した。英国としては、ペルシアにおけるロシアの計画に対抗し、ダーダネルス海峡でロシアを牽制し、極東でロシアの圧力に抵抗するより積極的な政策をとれば、強圧的な介入よりもアフガニスタンの治安維持向上にはるかに役立つだろうと唱えたのである。英国政府は、カーズンの主張は度を越しており、インドに関する大戦略としては独立性が強すぎ、英国の関与と資源への要求が大きすぎるとみなして、これを押さえ込もうとした。しかし、カーズンが前進戦略の基礎となる政治的および軍事的前提に辛辣な批判を浴びせることによって、前進戦略の優位性を損なったのは確かである。カーズンはこうした前提に、自信をもって自らの経験を引き合いに出しながら反駁した。その懐疑的な見方は陸軍省内の同調者らを勇気づけた。陸軍省作戦部長は1903年の「ロシアのアフガニスタン経由でのインド侵攻」に関するインド軍作戦演習シナリオを、歪曲した前提に基づくものとみなし、「いかなる状況においてもロシアがそこまで優勢になることは考えられない」として却下した。また、カーズンの圧力は英国の対露政策の活性化に一定の役割を果たし、実際に、ロシアの関心を別の方向へそらすことでアフガニスタンへの圧力を和らげる結果になった<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> ロシアのアジアとインドにおける軍事的野心に対する英国の懸念に関係する19世紀の文書は多数現存しており、ここではその一部を挙げるにとどめる。NA, WO106/6208, Analysis of General Kuropatkin's Scheme for the Invasion of India, War Office Intelligence Branch Memorandum, August 1886; CAB38/5, General Staff War Office Memorandum, Defence of India: Observations on the Records of a War Game played at Simla, 1903, 5 May 1904. BL, IOR, Curzon Papers, Mss Eur F111 695, Indian Army Intelligence Branch Memorandum, On the Power of Russia to Operate against Northern Afghanistan, 1899; F111 698, War Office Intelligence Division Memorandum, Distribution of the Russian Military Forces in Asia, June 1902; F111 699, Indian Army Intelligence Branch Memorandum, Russian Advances in Asia No. V, 1882-1884, 1885; F111 700, Indian Army Intelligence Branch Memorandum, Russian Advances in Asia No. VII, 1890-1895, 1896; F111 701, War Office Intelligence Division Memorandum, Twenty Years of Russian Army Reform and the Present Distribution of the Russian Land Forces, 1893; L/PS/18/A141, Abstract and Extracts of Translation by Mr. Robert Michell of *To India: A Military and Strategical Sketch, A Project of a Future Campaign*, by Capt. W. Lebedeff, [Russian] Grenadier Guards, St. Petersburg, 1898. 最後に挙げた資料は、英領インドに脅威を与えることの有効性についての長年のロシアの見方を要約し、ロシアは中央アジアにおいて、「我々の敵対者[英国]がクリミア戦争やベルリン会議の間に見せたのと同様の敵意を示した際には何時なりと利用する目的で、さらに強い立場」を占めるべきであると結論している。タカ派のレベデフは、「ヘラート、次にカンダハールとカブールを占領し、最終的にアフガニスタン全土を我が国の影響圏内に取り込めば、中央アジアにおける我が国のさらなる前進となる。これはロシアの利益のために必要であり、このことを軽視してはならない」と主張した。次も参照。Alex Marshall, *The Russian General Staff and Asia, 1800-1917*, London, Routledge, 2006.

カーズンは同様に自信に満ちた批判を、長く英国の北西辺境政策の二本柱であったパ  
ンジャーブ政府と英領インド軍にも向けた。カーズン総督は、広大な領土を管轄し、イン  
ド全体の主要穀物生産地の開発を主な関心事項とする州政府が、同時に全く異なる地域  
の全く異なる課題を効果的に管理することは期待できないと主張した。現存の「辺境行政  
区」内の定住民と、観念上の境界線の向こう側にいる厄介な部族民を両方とも統治するこ  
とを求めるのは、混乱を求めるようなものである。それよりも北西辺境を別の行政区域とし、  
観念上の線を正式な境界線とすべきだというのである。その新州を運営する民政官は境界  
地の問題のみに専従する。また新州はインド政府の直属とすべきであり、民政官らが自身  
の担当地区の事案を管理できる範囲を拡大すべきだとした。この提案はインドでもロンド  
ンでも激しい議論を引き起こしたが、最終的にはカーズンが勝った。カーズンはここでも、  
自身が持つこの地域に関する広範な知識を活用した。さらに、現地の民政官からの強力な  
支持を享受し、この地域に秩序を望むロンドンの意向を利用した<sup>16</sup>。しかし、この案をすべ  
て実現させることが必要であり、それを行うためのカーズンの計画は軍との間に問題を生じ  
させた。

北西辺境の治安維持のための堅固な軍事的枠組みは、ペシャワールとカイバル峠沿い  
を中心に域内に点在する要塞と守備隊のネットワークが担っていた。前進戦略の支持派  
は、この枠組みを強化するための野心的な開発、特に主要な山岳路に至り、そこを通過  
する鉄道線路の建設と、正規戦闘部隊の前方配備の増大を強く求めた。カーズンはこれ  
にきっぱりと反対し、さらに深く踏み込んだ。軍部はあらゆる意思決定を戦術的要件に  
基づいて行い、侵略に対しては懲罰的な報復措置にばかり頼る傾向があるが、それでは  
襲撃と報復の悪循環をエスカレートさせるだけだとカーズンは主張した。また、辺境での  
従軍による栄誉と昇進のチャンスに陸軍将校団が影響されすぎているとも指摘した。この  
ような主張をした高官は決してカーズンが初めてではない。しかし、カーズンはその中で  
最も高位にあり、最も決然とし、最も忌憚なく発言できる人物であった。しかも、彼がこ  
の主張をしたのは、英国の政府だけでなく市民をも動揺させた1897年から98年にかけて  
の血みどろの戦闘の余波の中であった。この問題に関しても、カーズンは結局自説を通し  
た。パシュトゥーン人地域内部に挑発するかのように前方配備された正規部隊の数は大幅

<sup>16</sup> カーズンの提案については、British Library 収蔵の交信文書で詳しく調べることができる。特に以下を参照。  
IOR, Curzon Papers, Mss Eur F111 158, Correspondence with Hamilton, Salisbury and Godley, 1899; F  
111 159, Correspondence with Hamilton, Salisbury and Godley, 1900; F 111 160, Correspondence with  
Hamilton, Salisbury and Godley, 1901; F 111 161, Correspondence with Hamilton, Brodrick, Salisbury,  
Balfour and Godley, 1902. これらの率直なやりとりから、カスピ海横断鉄道での旅や、カブルでアブドゥル・  
ラフマンと交わした地政学的問題についての議論などの個人的経験を躊躇なく利用し、政府や軍部における通説  
に異を唱えたカーズンの姿勢がうかがえる。

に削減され、機動部隊はインダス溪谷の安全な基地区域に再編成された。これらの部隊の代わりに、秩序・治安維持を請け負う現地徴募の非正規義勇軍や部族民兵が増員された。不従順な部族を大人しくさせておくための交付金は愚かにも削減され、不経済な結果を招いていたが、この交付金が賢明にも元の水準に戻された。カーゾンの政策に対する最初の大きな抵抗としてマスード・ワジリ族による襲撃が起こったが、カーズンはこれに、野戦部隊を送り込んで襲撃者を四散させる戦術と、マスード族の領土を封鎖して降伏に追い込むという忍耐強い戦略を組み合わせて対抗した。その後、近代兵器を没収し、適度な罰金を科し、今後襲撃があった場合は部族指導者に責任を負ってもらうという条件で和解した。以前より軽いこの措置は、次のようなメッセージを伝えることになった。すなわち、地域が比較的平穏である限り、英領インドは今後、北西辺境沿いではできるだけ穏やかに事を運ぶが、新たな問題が生じた場合はそれ相応に対応する、というメッセージである<sup>17</sup>。

カーズンの政策は、時宜を得たものであり、また本質的に良識あるものであったため、解決不能な問題の両方のレベルに実際的な影響を及ぼした。カーズン自身は、正論を貫き通すことから、とりわけ軍と対立したことの対価を払う結果になった。カーズンは1905年に議論を呼びながら総督を辞任したが、彼の政策と戦略はその後も存続した。同じ年、ロシアは日露戦争で屈辱的な敗北を喫した。この戦争が可能になったのは、英国がリンケージを実践して1902年に日本と防衛同盟（日英同盟）を結んだためであった。ロシアがこのアジアでの敗戦を受けて、欧州の優先事項へと大きく舵を切ったことにも助けられ、英国がインドに関して感じていた圧力が大いに緩和された。これにより1907年の英露協定の締結が可能になり、その時点では、アフガニスタンと北西辺境の諸問題を複雑化させてきた長きにわたる帝国間対立が解消されたかに思われた。しかし、これで問題が終わったわけではなかった。この対立だけが問題の原因ではなかったからである。終結までには以降も長く複雑な経緯があった。

第一次世界大戦の間、アフガニスタン政府は、中央同盟国側での参戦と英領インドへの侵攻を求めるドイツとトルコの圧力に抵抗した。条約義務を尊重し中立を維持するというこのアフガニスタンの意思決定は、苦境に立たされていた英国にとって渡りに船であった。大英帝国は、世界規模の全面戦争となったこの大戦に大勢のインド軍を動員することを余儀

<sup>17</sup> カーズンは1906年 Romanes Lectures の *Frontiers* と題した講演で自身の見解を概説している（講演録は1907年に Oxford University Press より出版）。2008年に IDEAINDIA.COM から出版された電子書籍 Roderick Matthews, *Lord Curzon: The Wisest Fool in Hindustan?* は読む価値があるが、カーズンの総督時代に関する最も重要な研究は今なお David Dilks, *Curzon in India, Vol. 1, Achievement*, New York, Taplinger Publishing Company, 1969 であり、その第9章では辺境改革と戦略的議論に関する見識ある分析がなされている。

なくされたが、国外に遠征部隊を送るためには、北西辺境付近の駐留軍を相当に低い水準まで削減する必要があった。これは計算済みのリスクであった。カブールのアミール、ハビブラは、多くのアフガン党派から英国から離反するよう圧力を受けていた。北西辺境は「穏やかに事を運ぶ」ようになったとはいえ、依然として管理することしかできず、掌握ましてや統治もできない地域であった。英領インド軍は侵略や襲撃に対する大規模作戦行動を1908年に2回、その後も第一次世界大戦中の1914年から1918年までの間にさらに6回行う必要に迫られた。また、域内のどこかで局地的な小規模軍事行動を実施する必要なく1年が過ぎることもなかった。1919年、アフガニスタンの敵意はついに頂点に達した。ハビブラが暗殺され、後を継いだアマヌラは、英国がインドの深刻な国内不安に気をとられている隙に乘じ、5月に正規軍を率いてインドに侵攻し、第三次アフガン戦争を引き起こした。両国はほどなく休戦に合意したが、その間に、ワジリスタン地域をはじめとするデュアランド線のインド側に住む多くのパシュトゥーン人部族民がアフガニスタン侵攻軍の支援に動いた。このため、英領インド軍はまたしても地域の「秩序回復」のための大規模軍事行動を起こさざるを得なかった。英国はついにアフガニスタンへの自主外交権の全面返還に同意し、何とか休戦を確保した。しかし、それでも境界地における辺境の力学が変わることはなかったのである。

ワジリスタンの「秩序回復」のための軍事行動は、1924年までずるずると続いた。1925年には新たな戦術が用いられ、それ以上の混乱を防止するための懲罰・抑止目的で空軍力が投入された。その後も1927年にモーマンド部族、1930～31年にアフリディ部族、1933年と35年には再びモーマンド部族に対して軍事行動が起こされた。これらは大規模な軍事衝突ではなかったが、1936年には、「狂信者」が「不安」を煽っているとの報告を受け、英領インド軍正規部隊が再びワジリスタンに進入して威嚇行動を行ったことにより、大規模衝突が勃発した。この頃には交戦規則が厳格化されたため、武力行使は少なくなっていたが、この衝突においては「穏やかに事を運ぶ」戦略が裏目に出た。域内では、ある村での宗教と法的问题をめぐる論争が元で、「イピのファキール」と呼ばれるカリスマ的な宗教指導者に煽動されて激しい怒りが渦巻いていた。控えめな対応は弱腰あるいは意志の欠如とみなされ、戦闘がエスカレートした。1937年までに6万人の正規部隊および現地部隊が域内に配備され、その軍事行動はやがて本格的な反乱鎮圧作戦へと発展した。作戦は1939年までには徐々に終息していく。この戦闘は結果的に、1947年に英国がインドから全面撤退し(少なくとも英国として)戦争をついに終結させる前の最後の大規模な軍事的関与となった。しかし、紛争は依然として未解決のままであった。後継国であるパキスタンは北西辺境州を引き続き独立した管轄区域とするよう強いられた。区域内の特に御し難い諸地域は現在も「連邦直轄部族地域」となっており、住民らは今なお、いかなる高次の中央当局の

統制にも断固として抵抗している<sup>18</sup>。

19世紀後半の英国の政治家は、言葉遣いが今とはかなり異なるであろうし、おそらくは、他の民族の国々に永続的な前向きな変化をもたらすことはできるという確信も強かったであろう。しかし、彼らのアジアにおける大戦略に関する諸問題の評価の仕方には、今日の欧米の政治家も驚かないはずである。19世紀の政治家も、脅威を過大評価し、自らの政策を複雑化させる傾向があったようである。ここには、地政学的な「空白領域」に対する認識という共通の脈絡がある。英国は、第一次と第二次のいずれのアフガン戦争でも、アフガニスタン政府を威圧して動かすことは怠らなかった。しかし、いずれの場合ももとよりそうする必要はなく、軍事的成功からは何一つとしてよい結果を得られなかった。19世紀のロシアの戦略的外交政策の中で、比較的低いリスクで最も大きな成果を収めたのは、インドの治安維持に関して英国を苛立たせる策であった。カスピ海横断鉄道が建設されるまでは、ペルシアからもトルキスタンからも、ロシア軍が首尾よくインドに侵攻できる手段はなかった。鉄道の完成後も、侵攻するためにはアフガニスタンを味方につけ、支援を得ることが必要であった。だが、そうなることはあり得なかった。アフガニスタン政府は、帝国主義大国の大君主的支配に服従したが、この政府は、従順でなく党派的で頑固な独立意識の強い国内の部族民の信頼を維持できるはずはなかったのである。1880年代のアブドゥル・ラフマンはロシアの圧力に屈しなかった。1915年のハビブラは中央同盟国側につかなかった。アフガニスタンの中立維持の決意を英国が信用しなかったことで、アフガニスタンの英国に対する敵意はそれまで以上に高まり、あらゆるもの複雑化させた<sup>19</sup>。

前進戦略の擁護派は、ロシアの工作員と軍隊には極めて優れた能力があると考えていたと見える一方、アフガニスタン征服に内在する諸問題や、英国がインド国民の信頼を保持する能力にはあまり重きを置いていなかった。ここに共通の脈絡が見える。伝統的な部族間の緩やかなネットワークによって統治されるアジアの脆弱国家は、近代欧州の侵略者の力と策略には抵抗できない。欧州の大国の管理下にあるアジアの住民が、他の欧州の大国や、その現地の協力者による計略に抵抗することを当てにはできない、という認識である。ここには、最も粗雑で最も明白な（この議論におけるレトリックにありがちな）オリエンタリズムの現れとして、むき出しの軍事力が文言として表現されていた。英国は露骨な文言でし

<sup>18</sup> Alan Warren, *Waziristan, The Fakir of Ipi, and the Indian Army: The Northwest Frontier Revolt of 1936-37*, Oxford, University Press, 2000; Fremont-Barnes, *The Anglo-Afghan Wars 1839-1919*; Heathcote, *The Afghan Wars 1839-1919*. パキスタンの北西辺境州は、名称だけは2010年に「カイバル・パクトゥンクワ州」に変更された。

<sup>19</sup> このアフガニスタンの政治的現実の当時の趣は、アブドゥル・ラフマンの自伝（編集協力 Sultan Mahomed Khan）に見ることができる。Abdur Rahman, *The Life of Abdur Rahman, Amir of Afghanistan*, 2 vols, London, John Murray, 1900.

か治安を保証できなかった。アフガニスタンに明確な立場をとらせ、その存立を保障することはできない。したがって、もともと秩序が乱れ住民が不干渉を望んでいる境界地は、単に緩やかに抑制するのではなく、厳しく統制しなければならないというわけである。

カーゾンの「国境閉鎖」アプローチは、北西辺境において実行可能な帝国防衛政策に最も近いものだった。「国境沿いでは穏やかに事を運び、ロシアに関しては過剰反応しない」戦略は、かなり効果的であった。その一因が、より広範囲の国際的な事態や混乱にあったことは確かである。また、この戦略で境界地戦争を終結させることはできず、まして解決するには程遠かった。だが、実はカーズンは、英国が終結や解決を試みるべきではないと主張していた。可能な限り、境界地に住むパシュトゥーン人自身に、変化し続ける周囲の世界と折り合いをつける自主的な方法を見つけさせるべきである。抑止のための暴力は必要だが、できるだけ穏便に行使し、またその行使は必要な場合に限るべきだとしたのである。境界地部族をさらに危険な外部の影響力や圧力から隔離することはできないことには、カーズンも同意した。しかし、英国の政策では、パシュトゥーン人には自ら選んだ以外の道は断固として歩まないという絶対不変の性質があることも考慮しなければならないというのがカーズンの考えであった。

公平を期して言えば、前進戦略の支持派も、カーズンの基本的な前提の一つには異論を持っていなかった。彼らもまた、北西辺境の戦争は終結できない戦争とみなしていたのである。しかし、カーズンはこの戦争を安全に管理できる、より緻密で費用の安い大戦略を提案した。より緻密な点は、二つの基本的問題を切り離して考えたことである。カーズンは、本当に必要な範囲以上にはアフガニスタン政府を痛めつけないように努めた。前進戦略は、真の問題はロシアの脅威なのだから、カブールの統治者は英国の傀儡として扱われなければならないという点を最低限の前提としていた。しかしカーズンのアプローチは、英国にその種の不安を捨てるよう求めた。ロシアの脅威は軍事的ではなく、主として地政学的なものであるとして対峙すべきだということである。そうすれば、終結できない要素、すなわち、境界地での戦争が大きな関心事とされる要因となる治安上のリスクが少なくとも低減する。境界地のみならずアフガニスタン全体を、必要な限り「空白領域」として容認し続けなければならない。大帝国というものは、いわゆる「グレート・ゲーム」だけでなく、長期に及ぶゲームを戦い、何よりも「すべての政治はローカルである」という古い格言を肝に銘じなければならない。それは少なくとも、終結不能なものを甘受することを意味するのである。1902年から1947年に撤退するまで、英国は多かれ少なかれそう行動したのであった。それによって、アフガニスタンや境界地の安定と秩序を現在の水準以上に高めることはできなかった。しかし、アジアとその周囲の世界に対しては、おそらく無害であり、かつ何らかの利益をもたらしたのではないだろうか。